

令和六年 上野天神祭 楼車 (だんじり)

一番 三 明 SANMEI さんめい FUKUICHO 福居町



しるし 三明明 (さんめいのぼりやま)
 横の文字は「福居町」。この文字は松尾芭蕉の筆ではないかと伝えられている。横は緋羅紗。作成当時の横が保存されていたので、台車を平成2年(1990)に制作し三明明横に名付きました。

だんじり 三明明 (さんめい)
 日、月、星(天体の表現)。横櫓の金具は三重県指定文化財。地車。せり揚げ万力をもって綱あげする工法。車体車軸を榎材で受けて弾力性のある技法を採用。
屋根 唐破風。とぼめ板に菊葵の絵。庇(ひさし)には、銅鍍銀(どうとぎん)の星宿(星座)屋根のせり上げを現在も伝承。星宿(星座)の、後ろは銀箔の月。前述の星宿と合わせて「日・月・星」だんじりの象徴としている。
天井 格天井造り。金箔の地に絨彩色の扇面花鳥図。
天幕 雲龍図(刺繍、伝「真名海屋」(ぬきなかいおく)の下絵)。
水引幕 三十六歌仙図の幕と西園雅集図の幕がある(ともに刺繍)。
前幕 虎竹園(刺繍、伝「円山店拳」の下絵)。虎の刺繍の厚みや、虎の表情が見所。
綱幕 飾金具二十四個は、三重県指定文化財。

▼みどころ
 「日・月・星」「天・地・人」の世界観が江戸時代の表現のままで感じられるだんじり「三明明」は、至って簡素な造りに極めて精巧で豪華な幕や金具で飾られた、荘厳という言葉がぴったりな気品漂うだんじりです。そんな「三明明」の見所の一つに、巡行時に角を曲がる時の「辻廻し」があります。ちょっと大きめで重量感溢れるだんじりを操るのは至難の技、コーナー取りから停止位置決め「万力」を降ろし、一気に90度だんじりの向きを替える一瞬は、指揮・テコ方・万力方・曳き手の腕の見せ所、片時も目を離しません。囃子方も賑やかな曲で花を添えます。また、そんな緊張感溢れる一瞬の時でも、法被の背中で愛敬溢れる「お多福」が、その場を和ませてくれます。「福居町」の名前を表したデザインで、豪華なだんじりに圧倒される時は、幸せを呼ぶ「お多福」に視線を移してみればいかがでしょうか。これも、我が町の見所です。

二番 二東・月鉾 NITOU TSUKIHOKO にとう・つきほこ KAJIMACHI 鍛冶町



しるし 月鉾 (つきほこ)
 平成2年(1990)に従来だんじりの屋根にそびえた「月鉾」を原型に、濱邊萬吉画伯の意匠により復興されました。

だんじり 二東 (にとう)
 「二東」は鍛冶町の古い町名の二之東町から名付けました。本来は三日月形の鉾を建て、「月鉾」と称します。新復興したしるしを「月鉾」としたため、それとの混同を避ける為新たに「二東」をだんじりの名称としました。(現在はどちらの名称も使われています。)
▼みどころ
 「二東」の評語を上げたのは何と云っても県の文化財に指定されている見送幕「雲電文」です。明時代(1368~1644)の刻糸(中国のきわめて精巧な高級織物、綴織)で孔雀の羽毛を混ぜて織られています。
屋根 唐破風。化粧梁上にとぼめ板に牡丹に唐獅子。
眼象 日月紋。
懸魚 葉牡丹の透かし彫り。
天幕 前面が「鳳凰に桐園」、左右・後面が「御殿図」(ともに緋羅紗地に刺繍)。
水引幕 故中八仙図(刺繍、明治19年(1886)。
綱幕 籬(まがき)に菊園(刺繍)。陶測明

しるし 月鉾 (つきほこ)
 飲酒時、「采菊東籬下悠然見南山」にならう。前幕白象に唐子(平成15年(2003)に復元新調)(刺繍)。
後幕 龍虎(貞道子、陳平)(刺繍)。
見送幕 雲電文 中国明時代(1368~1644)(綴織)。孔雀の毛を混ぜて織ったもので、三重県指定文化財です。現在、だんじり会館にて常設展示しています。祭礼巡行に使用の見送幕はこれを基に、昭和37年(1962)新調しました。
囃子 祇園囃子。囃子方の組織を二東社と云う。

▼みどころ
 だんじり二東・月鉾のみどころは前後の幕です。前幕「白象に唐子」は江戸時代後期(19世紀前半頃)に製作された刺繍幕でしたが、平成15年から2年余りの年月をかけ、見事に復元新調されました。白象と唐子や人物、樹木に至るまで忠実に再現され、特に白象の立体的な表現は、特別な盛上げの技法が駆使され、白亜の輝きに魅了されます。

三番 花冠 KAKAN かかん NISHIMACHI 西町



しるし 羯鼓 (かっこ・譚鼓)
 文久3年(1863)9月に再調した。高木長雄の記した由来書には別文のいわれがあります。西町しるし「羯鼓」のいわれ
 該鼓昔深島不驚
 昔、殿様の政治を諷する為住民が太鼓をたたいていました。殿様の政治よければ諷しめることがなく、太鼓の上に鶏が止まって、昔はうさぎは世の中が平穏である。その故事を引用して、形どったもの。
だんじり 花冠 (かかん)
 鼓を身につけて踊る羯鼓舞の花冠にちなんで名づけられました。宮殿を擬した華麗な簾の間があるだんじりです。毛彫打出しに本鍍金された飾金具が多く使われています。特に横櫓・踏台の金具は水引幕の細かな蘭亭曲水の宴の姿と共に「花冠」の存在感を際立たせています。尚、当町のしるし「羯鼓(かっこ・譚鼓)」も見どころの1つです。しるし台の勾欄を飾る金具も「花冠」同様本鍍金の毛彫打出し金具であり美術的価値の高いものです。
▼みどころ
 鼓を身につけて踊る羯鼓舞の花冠にちなんで名づけられました。宮殿を擬した華麗な簾の間があるだんじりです。毛彫打出しに本鍍金された飾金具が多く使われています。特に横櫓・踏台の金具は水引幕の細かな蘭亭曲水の宴の姿と共に「花冠」の存在感を際立たせています。尚、当町のしるし「羯鼓(かっこ・譚鼓)」も見どころの1つです。しるし台の勾欄を飾る金具も「花冠」同様本鍍金の毛彫打出し金具であり美術的価値の高いものです。

四番 薙刀鉾 NAGINATABOKO なぎなたぼこ SHINMACHI 新町



しるし 白楽天 (はくらくてん)
 中国の詩人、白楽天像の大作。嘉永4年(1851)9月、京都丸屋利兵衛の作。近年、松の木を添える白楽天像に形容を変え、衣裳も新調しました。
だんじり 薙刀鉾 (なぎなたぼこ)
 見送幕墨書銘から天明3年(1783)の頃、創建されたと考えられており、唐破風屋根中央に、薙刀を立てた姿は豪華な幕と相まって壮観です。
屋根 唐破風。
眼象 新の字の浮彫り。足元に雲形の彫刻。
懸魚 牡丹の透かし彫り。
天幕 前後は旭日に鳳と凰、左右は麒麟遊戯の図(緋羅紗地に刺繍)。
水引幕 富士の裾野の巻狩(刺繍)。安政4年(1857)に京都の縫師宮崎屋三郎にて新調。
二番水引幕(前)と調幕 雲竜波清文図(刺繍)16世紀後期のもの。
前幕 黄石公に張良が舌を捧げる図(綴織)。

▼みどころ
 だんじり「薙刀鉾」最大の見どころは豪華な幕です。上野天神祭の全てのだんじりとするに使われている最高級の織である刺繍6点の内5点が、その他の綴織12点の内6点が新町のだんじりとするの懸装品(幕)です。その中で庄巻の見送幕「蘭人嶽上遊ぶ図」です。平成28年(2016)に3年の年月をかけて現代日本の最高技術をもって1783年の新調当時のすばらしさを再現しました。一見の価値があります。是非ご覧下さい。

五番 鉄英剣鉾 TETSUEIKENBOKO てつえいけんぼこ MUKAJIMACHO 向島町



しるし 日・月・扇 (じつ・げつ・せん)
 平成元年(1989)に濱邊萬吉画伯の意匠により再興されました。天神様は日月の運行を司る神様で中国に由来する采配の具「唐扇」をあしらっています。行列曳行時、唐扇はゆっくり回転しながら巡行します。
だんじり 鉄英剣鉾 (てつえいけんぼこ)
 英は花房の意、従って花鉾を意味する。花鉾は宝暦6年(1756)。現在の鉄英剣鉾は安政6年(1859)。
屋根 てり破風。
前額 「探深(たんめい)」暗がりを探り。
後額 「剪莽(せんぼう)」草を刈る。
眼象 梅鉢紋。
天幕 花孔雀図(刺繍)。
水引幕 波之舞図(刺繍)。
前幕 漢公尚書図(刺繍)。
見送幕 鳳凰額群仙琴鶴園(綴織)。
囃子 祇園囃子。

▼みどころ
 「鉄英剣鉾」の歴史は宝暦6年(1756)に作られた「花鉾」に始まります。それからおよそ100年後の安政6年(1859)に現在の「鉄英剣鉾」が長田に屋敷を構えた安場武右衛門によって建造されました。屋根は切破風で古い鉾の形を良く伝えていました。前後の化粧梁には向島町に居住した藤堂藩の儒者兼兵法家高見照陽の書による「探深(たんめい)」「剪莽(せんぼう)」の扁額が掛けられています。暗がりを探り生い茂る草を刈るという開拓の精神を表しています。このだんじりの特色の1つは囃子座の欄縁の四隅にある黄金に輝く御幣で、他のだんじりには無いものです。四神(中国の神話で天の四方の方角を司る霊獣、東の青龍・南の朱雀・西の白虎・北の玄武)を鎮める為のもので鉾竿の伝統的な様式です。屋根上に立てるのは、足揃えの儀には銀の剣。本祭には金色の剣を飾ります。

六番 桐本 KIRIMOTO きりもと HIGASHIMACHI 東町



しるし 逆襲斗 (さかさかし)
 天保11年(1840)に発行された天神祭の版画「伊賀上野天満宮祭礼九月廿五日行列略図」に扉面に文字の「のし」を逆さに添えた図が残っており、これに基づき昭和53年(1978)に濱邊萬吉画伯の匠家設計により文字から逆襲斗に改め復興しました。
だんじり 桐本 (きりもと)
 神楽に生い茂る桐の大樹に担りどころを得たものである。文政10年(1827)9月新調。
屋根 唐破風。妻「前」雲に麒麟、「後」波に陣の彫り物。柱6本。
鬼板 鬼面の彫物。
懸魚 菊花の透かし彫り。
天井 切こまの松竹梅の飾絵。人形師・筒井猪久造。
天幕 牡丹に唐獅子(縫刺繍)。
綱幕 蘭亭曲水の宴(刺繍、伊賀の画家大北珣堂の下絵)。
簾の間 だんじり下層正面。天井には菊花の絵。擬宝珠勾欄付の張り出し。

▼みどころ
 東町のだんじり「桐本」は文政10年(1827)伊賀の仏師筒井備兵衛率により作られました。その当時菅原神社の境内には桐の大木があり、そこから神社のおひざ元地区である東町のだんじりは「桐本」を名付けられました。上野天神祭の他の8基のだんじりと比べ大きく異なるのは扉幕です。水引幕が無く、正面の袖幕から3面を連続した蘭亭曲水の宴の柄の曲で覆っています。もう一つの特色は桐本のだんじり囃子です。上野天神祭の他の8基のだんじり囃子が祇園囃子の流れにあるのと異なり、二連指鼓、太鼓、篠笛に鼓、三味線が加わった五奏奏です。曲の調子もゆったりとした雅やかなもので他とは趣を異にします。参考に桐本の曲を聴く位置は「桐本」の後方からが最適です。少し離れた後方から味わってください。

七番 其神山・葵鉾 KISHINZAN AOIBOKO きしんざん・あおいぼこ NAKAMACHI 中町



しるし 菊慈童 (きくじどう)
 現存する上野天神祭のしるしで庄巻。享和2年(1802)菅公九百年を契機として作られた伝えがあります。しるしの見送幕は中国明時代(1368~1644)の官服で作られたといわれます。(群青・赤・黄、紫等々の真向きの龍の蝦夷錦)以前はだんじりの見送幕であった。
だんじり 其神山・葵鉾 (きしんざん・あおいぼこ)
 いかねれば そのかみやま(其神山)のあふひくことしはふれどもふたはなるらん
 「其神山」は上賀茂神社の枕詞で「葵華」は賀茂祭の葵で「いかねれば」の起句を伊賀と結びつけ、だんじりの名を付けたといわれる。宝暦9年(1759)に其神山を造る。
鬼板 宝珠。龍の彫り物、破風尻(ひさし全体)で飾りつけ。
屋根 切こまの百花園。
天井 群鳥(刺繍)。
天幕 山水に麒麟(刺繍)。
水引幕 百花群芳園(刺繍)。
綱幕 帰去来の図、山園小梅の図(綴織)。

後幕 異道子龍を描く図(刺繍)。
見送幕 牡丹・孔雀・松(錦織)。
囃子 祇園囃子。

▼みどころ
 宝暦9年(1759)に其神山が造られました。その後改築を経て現在に至っています。見どころは風格ある大型の屋根です。鬼瓦には頂部に雲と宝珠、両流に精巧な竜の彫物を配っています。高さもあるためひときわ勇壮で大変素晴らしいだんじりです。後の扁額に新古今和歌集の歌「いかねればそのかみやまのあふひくことしはふれどもふたはなるらん」が彫り込まれています。「其神山」は上賀茂神社枕詞で「葵華」は賀茂祭の葵で「いかねれば」の起句を伊賀と結びつけ、だんじりの名を付けたといわれています。

八番 小叢山 KOMINOYAMA こみのやま KODAMACHO 小玉町



しるし 三社の託宣 (さんしゃのたくせん)
 三社の託宣とは伊勢神宮、石清水八幡宮、春日大社の三社の神のお告げです。小玉町のしるしは町の紋形である分銅型の外郭の中に天皇大神と八幡大菩薩、春日大明神を配置しています。
だんじり 小叢山 (こみのやま)
 芭蕉翁の名伶にちなんで名づける。「初しぐれ猿も小裳をほしげ也」。
屋根 唐破風(からはら)。
眼象 分銅(小玉)紋。足元に雲形の彫刻。
懸魚 雲に鶴の透かし彫り。
天幕 桐に鳳凰図(緋羅紗地に刺繍)。
水引幕 西園雅集図(刺繍、森寛吉下絵)。
前幕 右左に象と雀・虎(二十四孝のうち大舜・楊香の図)(緋羅紗地に刺繍、前川五橋下絵)。横は「忠則順天孝則生福、天降大孝萬方矣」(賈名松翁下書)。
前幕 龍と亀(緋羅紗地に刺繍)。前幕の雀(朱雀)、虎(白虎)、前幕の龍(青龍)、亀(玄武)で四神をあらわす。
見送幕 朝鮮通信使図(刺繍)。

▼みどころ
 だんじり「小叢山」の見どころの一つは、見送幕です。本祭の巡行に掛ける刺繍の見送幕は、朝鮮通信使を描いています。鎖国体制の江戸時代において、日本にやって来た外国人は、非常に珍しいものでした。朝鮮通信使の行列は、伊賀地域を通行することもありましたが、この幕をながめながら、当時の人々には外国からの貿易に思いをさせたことでしょう。もう一つは、曳方の法被です。曳綱を持つ曳方の法被には、楼車の名前の由来となった松尾芭蕉の名伶「初時つよ」も小裳をほしげなりが、小玉町の象徴である分銅紋とともに染め抜かれています。すでに登録されている上野天神祭同様、登録に向けた動きがあります。「俳句」もユネスコ無形文化遺産に登録されると良いですね。

九番 紫鱗 SHIRIN しりん UOMACHI 魚町



しるし 琴高仙人 (きんこうせんじん)
 琴高仙人が鶴に乗って水中から現れたという故事にもとづく。文化10年(1813)9月新調。
だんじり 紫鱗 (しりん)
 鮮魚の美称、魚町の表現、又の名を「庶尹九鱗」という。諸々の役人が一堂に会して調和すること。
屋根 唐破風。せり揚げ万力で屋根を揚げる。
懸魚 菊花に飾葉。
天幕 雲竜(刺繍)。裏面は丸龍蜀江(刺繍)。嘉永4年(1851)。
水引幕 群賢、琴書畫(刺繍)。
前幕 黄石公、張良、蝦夷仙人、鉄拐仙人、牡丹に孔雀、御殿圖(刺繍)。
見送幕 群仙園(刺繍)。
勾欄 総金具。「金具第一」である。
柱 総金具「上り龍」「下り龍」。
囃子 祇園囃子。

▼みどころ
 「紫鱗」とは鮮魚の美称で魚町のだんじりに最もふさわしい表現です。又の名を「庶尹九鱗」という(諸々の役人が一堂に会して調和する事。)とも言い、その文字が前後の妻梁の上部に書かれています。「紫鱗」の特筆すべき見どころは囃子座の4本の化粧柱です。雲の間を飛翔する「龍」を文様化した飾金具が巻かれています。前幕も5枚に分かれて中国故事の英雄が描かれており総金具の勾欄、天幕と合わさって重厚・豪華なだんじりです。